

永遠の土地から永遠の海へ？

——『説得』における「ホーム」とは何か——

金子 幸 男

序論：ホームとは

イングランドにおいては、土地は永遠の価値を持つものだった (Todd 269)。それは貴族やジェントリーといった上流階級に所有されていた。18世紀末から19世紀初頭にかけて、オースティンの『説得』以前に書かれた主要な小説はどれも、カントリーハウスの土地屋敷とそれが意味する秩序と安定に絶大な価値を認め、それが多少、揺らぐことはあっても、結末においては元の状態に復帰するのであった。『ノーサンガー寺院』に出てくるノーサンガー寺院、『分別と多感』のデラフォード屋敷、『エマ』のドンウェル・アビー、『マンスフィールド・パーク』のマンスフィールド・パーク、『自負と偏見』のペンバリー館、それらはいろいろあっても最後には安定と持続の場所、伝統が受け継がれる場所として安泰である。長男に問題がある場合でも、次男が牧師としてしっかりと支えていく。

しかし、土地の永遠性、すなわちカントリーハウスの秩序と安定は、小説『説得』において揺らぐ。結末において、ケリンチ・ホールの持ち主が誰になるかがあいまいなままで終わり、また主要な登場人物のウェントワース海軍大佐と准男爵家の次女アン・エリオットが結婚後、どこに住むのか、はっきりしないのである。それに戦争が起こる気配はまだやんでいない。『説得』を論じるときには、若き19歳のアンがラッセル夫人の忠告を受け入れて大佐のプロポーズを斥け、8年後に再会、成熟した二人が過去のしこりやわだかまりを解消して結婚に至る物語、個人レベルの恋愛プロットで考えるのが普通であろう。しかし、本論文では二人の結びつきを個人レベルを超えて、当時のイングランド社会や文化という広いコンテキストの中において眺めてゆく。別の言い方をすれば、本論文の目的は19世紀初めのイギリス社会において、土地の揺らぎ、カント

リーハウスの揺らぎは何を意味するのか、海／海軍の意味は何かを問うことによって、『説得』という作品を解明するところにある。まず序論では、この土地＝カントリーハウスの価値の揺らぎ、海の価値を説明するのに役に立つ概念、「ホーム」を導入する。

まずはカントリーハウスとイングランド国家の関係について、家庭という視点から見てゆこう。当時の保守派で、フランス革命を批判する書をものしたエドモンド・バークなら、カントリーハウスは、イングランドが受け継ぐべき伝統の最たるものとして、イングランドのアイデンティティの典型として、推奨するところだろう。それは、バークが継承 (inheritance) に価値を置き(富山)、国家を家庭の比喩で語っていることから分かる。次の引用は、『フランス革命についての省察』からの一節である。

この相続 (inherit) を選んだことにより、私たちは私たちの政治の枠組み (our frame of polity) に血のつながり (a relation in blood) というイメージを与えたことになる。つまり、政体 (constitution of our country) を、私たちの最もとおしい家族の絆 (domestic ties) で縛り、私たちの基本法を家族の愛情の胸元 (the bosom of our family affections) へと受け入れる。そして、我々の国家 (states)、囲炉裏 (hearths)、墓 (sepulchers)、祭壇 (altars) をお互いに引き離すことのできないものとし、それらを結びつけ、お互いを反映した慈善 (charities) の暖かさでそれらを大切にするのだ。(Burke 34)

公私の領域の分離がすでに始まっているこの時代にあって、私的領域である家庭、血のつながりのある家庭の比喩で語られるのは、本来は公的な領域として、政治経済の言葉で語られるはずの国家であり、バークは、理性よりも情感がこの国家を支えるという国家観を抱いていた。国家を家庭の比喩で理解することができるならば、国家と、上流の家族が住むカントリーハウスとの類似は明らかだ。つまり家庭的な国家＝カントリーハウス観がここには成立する。

ここでバークの考え方の時代性を批評家の助力を得てみておこう。マリリン・バトラーによれば、バークは、本能的な健全さ、本能的な慈愛という考え方を信じていたので、人間は家族、隣人、さらには国家元首を愛し、彼らに共感する(37)。これが国家を家庭としてとらえる見方の根底にある。この性善説的な考え方を、バトラーは、ヘンリー・マッケンジーを代表格とする18世紀半ばにおける感傷主義小説(sentimental novels)の台頭と、それを支えたデヴィッド・ヒューム(David Hume)、フランシス・ハチソン(Francis Hutcheson)らの新しい心理学、これら二つに結びつけている。人間の心理、人間の主観性はいかに形成されるか。それは、五感を通して入ってくる外界の刺激の束が印象となり、同時に連想をもたらすことによる。人間の内面は、同時代の無政府主義者ウィリアム・ゴドウィンがいうような理性がコントロールしているのではなく、不合理な本能が作用する領域なのであるが、その本能には社会性(特にバーク)と慈愛の作用が含まれている。環境に左右される受け身の人間像とも言っている、この感傷の時代(特に1760、70年代)の人間観は、フランス革命を恐れるバークにとっては好都合であったろう。なぜならば、この考え方からは、感情よりも理性を重視し個人の改善を信じ、現体制や社会を腐敗としてとらえるジャコバン(急進主義)的な考え方は生まれてこないからだ。バトラーは基本的にはオースティンを、個人の権利・自由よりも社会と権威への服従を説く保守主義の作家であるとみなしている。しかし、鈴木美津子氏は、特に『説得』において急進主義と保守主義の二つの物語が共存し、二つは動的に関係しあいながら歩みよっていく姿が見られるという。前者は個人の権利・意志の尊重、権威への反逆、束縛からの自由を標榜し、「活力」、「情熱」、「自己主張」などをキーワードとし、後者は個人に社会的制約を与え、権威への服従を説く立場で、「理性」、「自制心」、「義務」などがキーワードである。アンとウェントワースの再会と結婚に至る経緯には二つの絡み合い、すなわちアンが急進的な様相を、またウェントワース大佐が保守的な様相を、多少ながら帯びる様子が見られると鈴木氏は説く(239-62)。保守主義の基盤には土地があるので、この保守・急進の共存は土地の揺らぎと海の登場というこの小説のパターンとも関係するであろう。

さて、我々はこちらまで国家=家庭というパークの比喩を経由して、カントリーハウス=国家という図式をたてることができたのであるが、その国家そのものといっていいカントリーハウスと地主階級が、この小説では揺らいでいるのが問題なのだ。それはイングランドの揺らぎと言い換えることも可能だ。

このイングリッシュネスの揺らぎの問題を眺めてみるために、土地と家屋、そこに存在する家庭、そこで培われる文化を、人の情感と愛情が込められた「ホーム」という言葉で呼ぶことにしよう。*Oxford English Dictionary* (5.A.5)によれば、“A place, region, or state to which one properly belongs, in which one’s affections centre, or where one finds refuge, rest, or satisfaction.”と説明されている場所のことである。パークがイングランドを語るのに家庭の比喩を使った以上、このホームという概念を利用することは的外してはいないはずだ。ただし、パーク的に家庭を国家に拡大する思考に則れば、このホームには、カントリーハウスとそれを支える牧師館をさして言うホーム、その周りに広がる地方を故郷としてとらえるホーム、さらに広大な故国イングランドという意味でのホームがある。戦争のためにヨーロッパ大陸に出ている兵士や大英帝国に出ているイングランド人たちがいることを考えれば、故国という意味でのホームも視野に入れることは必要だ。ホームのこの広い意味における用法は、*OED* (6.A.6)が、“One’s own country, one’s native land. Used by Britons abroad, by inhabitants of (former) British colonies and territories, and † by those of British descent in the U.S., for Great Britain = the mother-country, the ‘old country’.”という形で説明を与えてくれている。ホームに故国という意味まで広く持たせることは、単に辞書の定義に従っているという以上の意味がある。ナショナル・アイデンティティを構成する要素として、「故国」であるとか「共通の文化」が浮上することを考えれば、広義のホームは、イングリッシュ・アイデンティティを考える際に大変役にたつのだ (A.D. スミス)。

ホームの問題を、国レベルのアイデンティティとして考えるために、『説得』を取り巻く時代状況を簡単に見ておこう。この小説は1817年出版であり、扱っている時代は、1814年の夏から1815年の2月半ばまでの、ナポレオン戦争終了直後の時代だ。ナポレオンの百日天下とワーテルローの戦いはこのすぐ後の

ことだ。イギリス国内ではフランス革命とナポレオン戦争を経験して、いまだに対仏ナショナリズムが盛り上がっていた時代であり、故国という意味でのホームが大きな意味を持っていた時代である。この故国を守ったのは、軍人であったから、あまり公的な政治社会を描かなかったオースティンにあって、帰還した海軍軍人をかなりの数、登場させたのは自然であり、そのような時代状況をこの小説が反映しているからであろうか、イギリスのナショナリズムの勃興を論証しているのがこの小説であると言う論者もある (Frey 214)。

国民の人気の高い海軍軍人の一人であるウェントワース大佐と、相対的に陰りが見えるジェントリー階級の娘アンとが結婚する。しかも、二人のホームがどこなのかは不明である。このことは、サー・ウォルターがケリンチ・ホールをクロフト提督夫妻に貸したこと、および自身は家族とともにバースに移り住んだこと、ケリンチ・ホールの行く末の不透明であることと共にそれらの意味を考察しなければならない。これは、この小説がホームの後継者を問う、「イングランドの状況」を扱った小説であること (Sales 171)、イングリッシュネスを問う小説であるということでもある。海辺の町ライム・リージスは皆の訪れた保養地であるが、そこにも海軍のハーヴィル大佐やベニック大佐の憩うホームがある。したがってここも考察の対象としよう。

トニー・タナーは、秀逸なオースティン論の中で次のようにこの作品の特徴を描写している。

『説得』の世界について特徴的なのは、現実の中心の欠如、権威という原理の欠如 (the absence of any real centre or principle of authority) である。伝統的な権威の源 (traditional sources of authority) の中には、家庭、両親、聖職者、社会的地位、尊敬される名前、なじみのある尊崇される場所、礼儀作法の決まり、義務と分別の掟、友情への配慮、真の愛 (the family, parents, the clergy, social rank and respected names, familiar and revered places, codes of manners and propriety, codes of duty and prudence, the care and concern of friendship, or true love) が含まれ、あまりに確実なものなので、内発的な権威となっている。しかし、この小説

では、そのような伝統的な権威の潜在的な源は、うまく働かなかったり、見えなくなってしまうたり、調子が狂ったりしている。それらは不在であり、散在し、機能不全に陥っている。硬直化し、淀むか、もっとひどいことには、まったく信頼できないものとなり、人を過ちに導くものとなる。あらゆるものがこの小説では変化の状態にある・・・。(Tanner 210)

この中に、「家庭」、「両親」という言葉が含まれていることに注目したい。塩谷清人氏は、それまで家族の絆を描いてきたオースティンが『説得』において家族の崩壊、その中の孤独な女性を描いていると言っている (237)。この変化と流動の時代にあって、主人公のアンは、「つきあいの乏しさからくる孤立した自己の苦境」(predicament of the isolated self responding to social deprivation) (Duckworth 180)、「社会、友情、愛情からの完全な孤立」(total alienation of the individual from society, friendship, and love) (Duckworth 180) を味わう。このような変化、流動の社会に置かれたアンは、記憶と反省からなる内面をもち、外面の行動力で人の役に立つ (Wiltshire, "Persuasion" 76-83) 人物であるが、没落していくジェントリー階級のホームを後にし、自分にふさわしいホーム探しをする。

ホームという考え方を導入したので再び本論文が扱う問いをまとめておこう。この論文では、権威の象徴、イングリッシュネスの永遠の象徴であったカントリーハウス=土地というホームに代わるものとして、何がホームの可能性として示唆されているのか？ イングリッシュネスの揺らぎは、どの方向で収束しようとしているのか？ 海は安定性を備えたものとして立ち現われるのであろうか？ 本論はこれらの疑問に答えてゆこうという試みである。

これから、具体的な四つの場所 (ケリンチ・ホール、アッパークロス、ライム・リージス、バース) を分析していくが、その前にまずは一体、ホームと呼べるような家庭の場 (domesticity) に起こった社会的・文化的変化とは一体どのようなものだったのかをみていくことにしよう。主として依拠する、メアリー・プーヴィ (Mary Poovey) と、ナンシー・アームストロング (Nancy

Armstrong) は、その変化を大体、17 世紀末から 18 世紀、19 世紀初めにかけて、すなわち、「長い 18 世紀」において起こった変化ととらえている。

I 社会的・文化的コンテクスト

ナンシー・アームストロングは、18 世紀イギリス上流社会は家庭の理想を追求し、望まれる女性とはどういう女性かというジェンダーに関わる問いかけをする中で、選挙権さえ持たないのに、女性という個人が誕生した、と主張している。17 世紀までは、人は、地位・身分 (status) や経済力によってアイデンティティが決まるのであった。したがって、貴族の女性は富を象徴する装飾的な身体として、血筋と富を見せびらかすことを期待されたのであり、男のための貴族的文化の時代であった。振る舞いについての本も男性向けのものが多かった。しかし、女性向けコンダクトブックが多く書かれるようになり、女性の内面の質というものが問われるようになり、女性には主体性 (subjectivity) があるとみなされるようになった。貴族的な術示的消費の文化から、家庭的な理想を実現する女性の内面的な徳を重視する文化へと変わっていった。このような家庭の理想の言説を生み出したコンダクトブックが、後に中産階級と呼ばれるものを生み出したのだとアームストロングは主張している。

その望ましい女性の資質とは、独身女性であれば、慎み、謙遜、分別、儉約の精神、虚栄を避けるための正直さである。無垢で受動的な乙女が望ましいとされた。結婚後は、有能な妻、自己制御 (self-regulation) できる女性がよしとされた。このような妻は、家事の切り盛り、召使に対する采配、子供の管理、娯楽の計画、病人への配慮などができることを期待された。暇を持って余している貴族の女性ではなく、かといって、労働という野卑なことに時間を費やす女性でもなく、家庭をうまく切りもりする女性がよしとされた。ここでタナーの言葉を借りれば、安定した秩序ある社会の実現と維持のためには、財産 (property) だけではなく、「品格、道徳性、礼儀正しさ」(decorum, morality and good manners) のような「品の良さ、たしなみ」(propriety) (18) も必要なのであった。

その品のよさをもった女性を、プロパーレディ (proper lady) と名づけたの

はメアリー・プーヴィである。彼女は、家庭という私的な領域と政治経済という公的な領域の分離、社会における家庭（domesticity）重視の姿勢への転換を次のように説明した。17世紀末まで女性は、「我々のみじめさをもたらす母」（“Mother of our Miseries”）、「墮地獄をもたらす者」（“agent of damnation”）（Poovey ix-x）であったが、19世紀半ばまでには、「時代の希望」（“hope of the age”）、「天使または淑女」（“Angel or Proper Lady”）となっていくた。「18世紀の末までには、淑女はおなじみの家庭的な伴侶だった。彼女の存在は慰めであり健康にもよかった。というのは彼女の欲求は主人の意志に優雅にも従っていた」（the Proper Lady was a familiar household companion. Her presence was comforting and salutary, for her desires bent gracefully to her master's will.）(3) からであった。プーヴィによると、このような淑女を中心とする家庭崇拝が広まったのは、ピューリタンの考え方と中産階級台頭による職住分離によるものと言う。ピューリタンにとって、家庭は宗教的・社会的訓練を行う場所であり、家庭における鍛錬によって精神的・社会的成長という目標を達成するのであった（Poovey 7）。家庭が宗教的訓練を行う場となったのは、聖書が家父長制的な家庭をよしとし、女性の活動を狭く定義し、家庭内の仕事に限定したからである（Poovey 8）。

今まで見てきたような家庭崇拝と理想的な家庭の女性についての説明は、アンと他の女性登場人物を比較するときには役に立つであろう。それでは、海軍軍人であるウェントワース大佐を見るときには、どのような見方が役にたつであろうか。19世紀は、産業革命による都市化や科学技術の発達が可能にした交通・通信網の整備、大英帝国の拡大に伴い、エンジニアや官吏などを含む専門職の需要が高まった時代であった。ジャネット・トッド（Janet Todd）はオースティンの時代に専門家の地位が高まったことについて、必要性だけではなく、ジェントリーとのつき合いという観点から次のように述べている。

専門職における出世は、ジェントリー階級の生まれではない者が、高い身分に入って行くことを可能にした。この上昇のプロセスを強化した考え方がある。それは、ジェントリーは自らの生命と財産とを医者や弁護士にゆ

だね、魂は聖職者に、王国そのものは陸軍・海軍の指揮官にゆだねているのだから、これら専門家は社会において高い地位をしめるべきだという考え方である。(Todd 367)

このような専門職に対する肯定的な見方の登場に伴い、ウェントワース大佐も、ある程度は社会的地位が高いとみられていたと考えてよからう。

ジェントリー階級の女性アンと、アッパー・ミドルの専門職階級ウェントワースという出自の異なる者どうしの結婚を考える時、共通に持っている要素は何かを考えることも、この作品をながめるのには役にたつ。アーヴァイン (Irvine) によれば、「長い 18 世紀」において、古くからあるエリート地主階級と新興の富裕層、特に資本家階級の間には、ポライト・カルチャーが共有されるようになってきたと言っている。新しい社会の規則と価値観、ポライトな行動規範が登場してきたということである (Irvine 8-9)。もう少し説明すると、『タトラー』(1709-11)、『スペクテイター』(1711-12 & 1714)、『ガーディアン』(1713) を筆頭とする印刷出版物を通じて、会話にふさわしいトピック、ドレスの標準、文学・劇・オペラにおける趣味の標準についての言説が流布する。その他に道徳、イングランド社会の一般的考察も含まれる。際立った特徴は、党派性を出さないということ、財産 (property) を持っている者を、社会的身分、党派、宗教の別で区別しないということである。財産を持たない大衆、粗野な大多数にはこのポライト・カルチャーはあてはまらないが、財産をもっている商人階級、拡大して専門職階級と、地主階級には適用される。商人階級は、粗野な物言いと、財産のない祖先を思わせる関心 (プロテスタントのファンダメンタリズムと芸術への不信任) を捨て去り、地主階級は、横柄さ、暴力、暴飲、衒示主義、性的放縦など、相続・継承される権力に付随する伝統的な気質を捨て去るところに、ポライトな書き方、話し方、行動様式が成立する。ポライト・カルチャーはこのような礼儀作法に則った社会に成立する文化である。アンとウェントワース大佐も出自は異なっても、この文化に属していることがわかるであろう。

また、ほぼ同じことを別の言葉を使って言っている批評家がいる。ジェイソ

ン・ソリンガー (Jason Solinger) は、ポライト・カルチャーに近い意味で、「交流」(Commerce) という言葉を使って長い 18 世紀の変化を説明する。長い 18 世紀、社会はジェントルマンの意味を徐々に、生まれによるジェントルマンから、都会趣味を持ち、経験豊富で読み書き能力のできるジェントルマンへと変化させた。上流階級は、これまで低く見てきた学問に高い地位を与え、上流に属するものとした。また、商人、小売商、製造業者の中産階級は、富を蓄えながらジェントリーや貴族などの上流社会へ入ってゆきジェントルマンとなるためには、「交流の人」(“A man of Commerce”) となることが必要だった。この“commerce”は、狭い意味の商売、商品の交換だけを意味するのではなく、幅広く、言葉、思想、義務、サービスの交換を意味し、人事万般にわたるトータルな人とモノの交流のことであったと言われている。「交流」という言葉には王室や田舎への旧来的なサービスの提供だけではなく、軍役や外交、そして会話や市民的な議論も含まれている幅の広い言葉であるが、ポライト・カルチャーという上流とアッパーミドルが共有する文化と重なることの多い言葉とみていだろう (Solinger 275-81)。

この節では、家庭の場に起こった社会的・文化的変化に着目し、家庭崇拜とプロパーレディの言説が長い 18 世紀にいかにか誕生してきたかを見てきた。これはヒロインのアンと他の女性を比較するときには役立つであろう。アンの意中の人であるウェントワース海軍大佐は専門職の需要と評価が高まるにつれ、出自の違いがあるにもかかわらず彼女と結婚するのにふさわしい人物になるのであるが、二人の結びつきは、当時、ジェントリー階級とアッパー・ミドル・クラスの間に共有されつつあったポライト・カルチャーによっても正当化されるであろう。さらに中産階級はジェントルマンになろうとして、「交流の人」となる。大佐はポライト・カルチャーを身につけた交流の人とあっていい。アンと一緒にいる社会的・文化的条件は整ったのである。

Ⅱ. ケリンチ・ホール：出てゆく者と入ってくる者

——サー・ウォルター、エリザベス、アンとクロフト提督夫妻——

イングリッシュネスの揺らぎは、サマセット州ケリンチ・ホールの当主サー・

ウォルター・エリオット准男爵の地主としての振る舞いに問題がある点、置かれた社会的経済的状況に表れている。

サー・ウォルターは、『イングランドの准男爵総覧』を見ることに無上の喜びを覚える(5-6)。その本は閑つぶしともなれば、慰めともなる大事な存在だ。彼は、ウォルター家の記述のそばに、末娘メアリーの結婚とその相手チャールズ・マズグローヴ、現住所のある地域の名前アッパークロス、さらには自分の妻の死んだ月を手書きで記入する。それが彼のなすことのできる改良(improvement)であるとは、語り手の皮肉はきつい。というのは普通、地主の行う改良といえば農業労働者のためにコテージを建てなおしたり、道路を改修したり、風景式庭園を作ったりすることなどであるが、そういったことではなく、家柄にこだわり事実を記載することに喜びを見出すだけなのだ。地主にふさわしからぬ人物ということだろうか。さしあたっては、男の子供に恵まれていないので、弟の曾孫にあたるミスター・エリオットが推定相続人となっただけであるが、長女のエリザベスの相手と決めていたその推定相続人のミスター・エリオットには袖にされ、疎遠なままになっている。ケリンチは不安定なホームである。

そのホームを営んでこれまでやってこられたのは、夫人のレディ・エリオットの分別と家政の腕前によるところが大きかったが、夫人が亡くなってからは、家計がたちゆかなくなる。その理由は准男爵の虚栄心である。「虚栄心が、サー・ウォルターの始めであり、終わりであった。外見と地位に対する虚栄心である」(6)とあるとおり、いくつになってもハンサムな外見を取り繕い、派手な生活を送ったために、借金まみれになってしまうのである。このように彼は地主として、家と土地を経営する能力に欠け、また近隣の村人たちの生活に対する配慮にも欠けるなど、パターナリズムを実践している気配はない。長女のエリザベスにしても儉約といえばチャリティを減らすことくらいしか思いつかない。上流階級の見せびらかしのメンタリティを発揮する場所(Irvine, Armstrong)がケリンチ・ホールであり、パターナリズムを維持できないのが地主のサー・ウォルターとその娘のエリザベスである。この衒示的な貴族的傾向については、Irvineが次のように言っている。

貴族的な女性のアイデンティティは、彼女の物理的な身体の周りに構築されていた。母親としてか、または公的な場での性的な見せびらかしの対象（彼女自身の美、高価な衣服と宝石）としてである。それに対して、礼儀正しい女性の理想は、その女性の内面の、精神的・情緒的な性質によって定義されていたのであり、外側の身体的な性質によるものではない。(Irvine 10)

この貴族的な女性のはでな見せびらかしの傾向は、エリザベスとサー・ウォルターに見られ、礼儀正しい女性の理想のほうは、I節で述べたプロパーレディの姿勢と言っていいただろう。

最終的には、ケリンチ・ホールにとどまったまま切り詰めた生活を送ることは虚栄心が許さなかったため、サー・ウォルターはケリンチ・ホールを貸しに出し、代替案のバス行きを承諾する。地主がお金に困って、先祖代々の土地を離れるということは、推定相続人のサー・エリオットとの仲が悪いことを考えると、誰がホールを継ぐのが曖昧になることであり、ひいてはイングランドを誰が継ぐのが曖昧になるという大問題へと拡大するだろう。

次女のアンだけは、レディ・ラッセルの忠言を受け入れて、若き日のウェントワース大佐と結婚することを思いとどまり、儉約の方法についても真剣に考え、ホールを去る前には、教区民から最後の挨拶がしたいと訪問を請われ、一軒一軒家庭訪問するなどしている。アンは地主の妻として有能な者になることが期待されるが、そのアン自身は、ミスター・エリオットとの結婚を想像すると以下のように考えている。

ほんのわずかの瞬間、彼女[アン]の想像力と心は幻惑された。自分の母親と同じ立場に身を置くという考え、レディ・エリオットという貴重な名前が彼女自身の中で初めて甦ったという考え、ケリンチに呼び戻され、再びそこを自分のホームと呼び、永遠のホームと呼ぶのかと思うと、すぐには抵抗できない魅力を感じた。レディ・ラッセルはもう一言も言わず、なりゆきに任せることにした。夫人が思ったのは、エリオット氏がその時、

礼儀正しく自分の心を伝えることができさえしたらよいのにといいながらも、これは要するに、アンが信じてはいないことを、ラッセル夫人は信じていたということだ。エリオット氏が告白している姿が、再びアンの落ち着きをもたらした。ケリンチと「レディ・エリオット」の魅力はすっかり消え失せた。アンには彼を受け入れることができなかった。気持ちの上で、ある一人の人のほかに思いが行かないというだけではなく、彼女の判断力が・・・エリオット氏にノーと言っているのだった。(150)

母親のイメージを自分と重ね合わせることはできるものの、そこに登場する自分の相手がミスター・エリオットということになると、決して受け入れることはできないアンの姿がここにはある。

実際にそうなるかどうかは別として、ケリンチ・ホールを継ぐのにふさわしいのは、クロフト海軍提督夫妻のような人たちであることがこの作品では示唆されている。夫妻はホールの借り手であるが、彼らが象徴する海軍というものを、サー・ウォルターが評価していないことはまさに彼らが後継者として適任であることを示している。サー・ウォルターの海軍嫌いにはいくつか理由がある(20-21)。氏素性の定かならぬ者が手柄次第で出世して高位につけること(20)、若さと活力を早く失ってしまうことである(20)。後者については、かつてロンドンで、ボールドウィン提督という実際には40歳なのだが、外見は60歳の軍人を見かけて驚いたことがあるという例をサー・ウォルターはあげてみせる(20-21)。

海軍だけではない。サー・ウォルターは専門職も否定する。サー・ウォルターの相談役の弁護士シェパード氏の娘ミセス・クレイは、サー・ウォルターの考えを支持する。地主との再婚を目論んでいるので、海軍以外の専門職をも卑しめ、彼の機嫌を取るかのようだ。夫人いわく、兵士は裕福でないために老いが早い。また、穏やかな専門職であっても、身体的な疲労の代わりに、心労があると言う。弁護士は心配ごとで身体を引きずるように仕事をし、医師は始終仕事で、どんな天気でも往診にでかけ、聖職者は病人の部屋に入って病気をもらおう(21)。こうなると老いるのが早い。唯一専門職につかない人間、カントリー・

ジェントルマンのみが健康と美しい外観を維持できる (21)。

実際、長い間確信していたのですよ。あらゆる専門職がそれなりに必要で名誉なものなのだということ、それはそうです。でも専門職につく必要がなく、田舎で規則正しい生活を送ることができる者、自分の時間を選び、自分の趣味を追い求め、自分の地所に住みことができ、もっと欲しいという苦しみのない者たち、そのような人たちだけの運命なのです。健康と見事な外見の恵みを最大に保つことは。(21)

仕事をする義務もなく、通常の生き方をし、好きな時間を選んで好きな事をし、地所からあがる収入で食べていく。クレイ夫人言うところの、このジェントルマン風生き方には、しかし、欠けている点がある。真のジェントルマンに必要な、パターンリズムの仕事や、地方の名士として果たすべき治安判事や議員といった名誉職の仕事が見えてこないのだ。ただし、クレイ夫人のすすめる生き方を収入の制約を無視して追求するとサー・ウォルター流生き方となる。クレイ夫人は外からだけ描かれ、内面にまで踏み込んで描写されることはなく、アンやレディ・ラッセル、ひいては読者にとっては芳しからぬ人物として描かれているので夫人の考え方は受け入れられないものである。

このような欠陥のあるジェントルマン風生き方と対極にあるものとしてクロフト夫妻は造型されている。しかも、その生き方はタナーが言うようにイングランドというネーションを救う試みである。

18世紀の初めの頃、支配階級は、放蕩、道徳的なだらしなさ、さまざま程度の粗野、垢ぬけしないこととの連想が強かったが、ジェイン・オースティンの良い作法に関する深い関心はただ単に修道院の上品さの反映ではなく、政治的な姿勢であった。道徳を矯正し、監視し、高めることによって国家を救おうとする幅広い試みに関わっていこうという姿勢 (an involvement with a widespread attempt to save the nation by correcting, monitoring and elevating its morals) であった。(下線は筆者、Tanner 27)

クロフト夫妻の生き方や態度はナショナルなレベルで考えるべきことなのである。それはケリンチ・ホールがナショナルなレベルを持つということでもある。

では、具体的にクロフト夫妻はどのような人物として描かれているか。アンは、クロフト夫妻を、次のようにケリンチ・ホールにふさわしい人物として描く。

彼女はクロフト夫妻をととても高く買っていたので、父はいいテナントを得て大変幸運だと考えていた。教区の人たちも良き模範を得られたと確信し、貧しい者たちは最高の心遣いと援助をあてにできると確信していた。したがって、家を移らなくてはならないということがどんなに悲しく恥ずかしいことであっても、留まるにふさわしくない者たちは去り、ケリンチ・ホールはその所有者よりもふさわしい人の手にわたったと良心にかけて感じることができた。(117)

クロフト夫妻は、教区の模範となり、チャリティを施せるほど、パターンリズムの浸透した村を築くことのできる人物として描かれている。優良なテナントとして夫妻を紹介した弁護士シェパード氏も、クロフト氏は、「考え方においても振る舞いにおいても、きわめて紳士である、うるさいことは言わない、狩猟権がなくても構わないと思っている」(22) と言う。また、クロフト氏は、洗濯室のドアをはじめ、改善(improvement)をいくつかおこなったことをアンに言う。極めつけの改善は、いくつもあった鏡を取り除いたことである。

自分たちを正当に評価してもらうためにも言っておかなくてはならないのですが、いくつかおこなった改善はすべてうまくいきましたよ。ですがね、すべては妻のお手柄なのです。私がしたことと言えば、かつてはあなたのお父様の化粧室であり、今は私の化粧室から、大きな姿見を複数、片づけたことです。お父様はとてもいい人だ、大変な紳士だと思いますよ。でもね、エリオットさん・・・私は思うんですが、御父さんはお歳のわりには、かなりのおしゃれですね。あんなに多くの姿見があるとは。いやまったく、

あれでは自分から逃れられませんよ。ソフィーの助けを借りてすぐに場所を移動させましたよ。今では快適、片隅には小さなひげそり用の鏡があるだけです。(119)

虚栄心の象徴とっていい姿見をいくつも置いていたというのは、いかにもサー・ウォルターらしく、その馬鹿さ加減がよく伝わってくる。それを諧謔を交えて語っているのは、クロフト氏なのである。姿見のエピソードを巡る二人の人物の対照によって、読者はクロフト氏のケリンチ・ホールの主人としての適格性を知るのである。

第II節では、サー・ウォルターが地主としての責任と義務を全うせず、虚栄心に支配され乱費と借金を重ね、先祖代々継承してきたケリンチ・ホールを出て行かざるを得ない人物である点に、イングリッシュネスの揺らぎを見てきた。エリオット家の中で唯一アンだけが貴族的な見せびらかしの文化に染まっていないプロパーレディとして、ホールを継ぐのにはふさわしいのであるが、彼女が推定相続人のエリオット氏を毛嫌いしている以上、その可能性はない。サー・ウォルターは海軍軍人やプロフェッショナルには否定的な評価を下しているのだが、実際にホールの住人としてふさわしいのは、借り手のクロフト海軍提督夫妻であった。夫妻は教区の模範となり得る人物として描かれ、サー・ウォルターのような虚栄心を持たず、道徳的な意味でネーションを救う可能性をもったカップルとして位置づけられているのであった。

Ⅲ. アッパークロスのお屋敷

カントリーハウスに揺らぎがみられる例としてケリンチ・ホールを見てきたわけだが、次にアッパークロスのお屋敷を見ていきたい。ここはケリンチ・ホールからは3マイルしか離れていないのだが、比較的安定した秩序ある土地として描かれている。そのあまり揺らぎのない理由も探してみたい。

エリオット家の末娘のメアリーが嫁いで行ったのが、チャールズ・マスグローブ (Charles Musgrove) で、中規模の村アッパークロスの地主マスグローブ家の長男だ。二人は農家を改築したアッパークロス・コテージに住んでいる

が、4分の1マイル離れたところにある、マスグローブ家の実家のお屋敷自体は、「大きな家」(Great House) と呼ばれるカントリーハウスだ。

ただ、そのような安定の象徴であるべき「大きな家」にも変化の兆しが見える。マスグローブ夫妻の親の世代と、チャールズ、ヘンリエッタ、ルイーザの子の世代との間には、新旧の交代があるとされているからだ。

マスグローブ家は、その家と同じように、変化の状態にあった。ひょっとすると、改善かもしれない。父と母は古いイングランドの習わしに従い、若い者たちは、新しいやり方に従っていた。マスグローブ夫妻はとても善良な人たちで、親しみやすく、もてなしの精神も行き届いていた。あまり教育はないし、上品とは到底言えなかったが。子供たちは現代的な精神と作法を身に着けていた。(38-39)

マスグローブ家の二人の娘はエクセターの花嫁学校で淑女としてのたしなみを身につけて帰ってきて、「当世風で幸福かつ陽気な」女性(39)として描かれている。二人の姉妹は「衣服はすばらしく、顔も可愛く、元気いっぱい、マナーも自然で心地よさそうであり、家では偉そうにすることができるし、外ではお気に入りにしてもらえる」(39) ので、アンは、「知り合いの中で最も幸福な姉妹」(39) と考えていた。しかし、かと言って、二人の境遇を得るために「自分の洗練され教養あふれる知性」を手放す気にはなれなかった。ただ、姉妹愛だけはうらやましいと思った。自分の姉と妹との間にはそんなものはなかったからだ。おそらくアンは、老マスグローブ夫妻の落ち着きとはうまくやっていたのではなからうか。このお屋敷の安定さは夫妻の落ち着きによるところが大きいだろう。

このお屋敷が安定感を得ているのは、旧世代に属する夫婦の貫録によるだけではない。海軍とのつながりにもよる。第一巻第8章では、ウェントワース大佐、クロフト提督夫妻の訪問を受けたマスグローブ家の人たちは、応接間で船上の日常生活を耳にして好奇心をかきたてられる。海上の生活、海軍の話を聞くことなど、海軍軍人を馬鹿にしているエリオット家の団欒では考えられない

ことである。そして、マスグローブ夫人は『海軍年鑑』を手にとり、ウェントワース大佐が初めて指揮をとったアスプ号を調べる。サー・ウォルターが『準男爵年鑑』を開いて自分の家柄にうっとりしているのとは対照的に、マスグローブ家は国を守る海軍に関心を示す。アスプ号はおんぼろ船だったという大佐の言葉に、提督は、アスプ号が人気の高い船で指揮を取りたいという希望者が多い船だったとたしなめる。マスグローブ家は次にラコニア号を調べる。老夫妻の今は亡き息子のディックがラコニア号で大佐の指揮下に入っていたと思われるからである。実際にはディックは愚鈍で冷酷な厄介ものだったらしいが(48)、大佐はそれを口にしない配慮を示す。さらにはクロフト夫人が船の上で提督と暮らしていたことなど、夫人のプロフェッショナルぶりも語られる。マスグローブ家は、海とのつながりのある故に肯定的に描かれていると思われる。

以上見てきたように、アッパー・クロスのお屋敷は新世代が旧世代からバトンを受け継ぐ変化の途上にあるとは言え、旧世代に属する老地主夫婦の安定感を維持しながら、海軍とのつながり、海への高い評価によって、いまだに相続継承が行なわれる場所として機能しているのである。

IV. ライム・リージスと海

ウェントワース大佐の友人、ハーヴィル大佐が足を負傷してライム（マスグローブ家の地所アッパークロスからは20マイル程度の距離）にしばらくは滞在することになったため、マスグローブ家の息子夫婦、二姉妹、そしてアンらは、ウェントワース大佐についていき、ライムへ泊りがけの遠出をすることになる。第II節では、クロフト提督夫妻の姿を通して海軍軍人が海上だけではなく、田舎においてもカントリー・ジェントルマンとしてふさわしいことを、サー・ウォルター・エリオットの怠惰、虚栄、浪費と対照させて描いていたが、ライムでは、さらに海のすばらしさと船乗りの美点が強調される。

海辺の町ライム・リージスは、二つの点ですばらしい。まず、周辺のいくつかの村とともに、風光明媚な場所であり、旅行ガイドブック的な紹介がなされる(89)。一行が訪問したのが11月で観光シーズンを過ぎて人がまばらになって閑散としているにも関わらず、海に突進しているような本通り、湾を取り囲

むコブ（突堤）へ通じる遊歩道、昔ながらの驚異と新しい改善（improvement）が施されたコブそのものに、訪れた者の目は引きつけられる。さらには、海の空気は健康と若返りをもたらす（95-96）。アップパークロスの教区牧師、老シャーリー師（Dr Shirley）は健康のために訪れ、かなりの効果があった。これは、海上生活をする海軍軍人はすぐに老けて活力を失ってしまうと言ったサー・ウォルターとは逆の主張である。海は男性的というよりも女性的な癒しの力を持つものとして、いわば家庭的なものとして、ホームとして描かれる。

この海と家庭らしさの深い関係は、ハーヴィル大佐の借家の描写に如実に描かれている。海＝ホームという観点から深い分析を加えたモニカ・コーヘン（12-43）は、船乗りがホーム・キーパーであり、船はホームに他ならず、「海は専門職の作るイングランドのホームとなる」（“the sea becomes a professional English home”, 13）と言う。ハーヴィルの家に入ったアンは、多くの客を入れるには狭すぎると一瞬感じたのだが、「実際の空間を可能な限りうまく活用するため、また下宿の家具の欠陥を補うため、さらに冬の嵐に対して窓とドアを守るために、ハーヴィル大佐が考案したさまざまな工夫や見事な按配を見て」（“from the sight of all the ingenious contrivances and nice arrangements of Captain Harville, to turn the actual space to the best possible account, to supply the deficiencies of lodging-house furniture, and defend the windows and doors against the winter storms to be expected, 92）、心地よい感じが湧きあがってくるのであった。備え付けの月並みな物にまじって、大佐が見事に作った珍種の木製品、遠くの国から持ち込んだ奇妙な価値ある物が輝いていた。大佐は、「絵を描き、ニスを塗り、大工仕事をし、物と物をくっつけるのだ。子供のために玩具を作り、改良を加えた新しい網用針とピンをも作製した」。普通、海軍の船の上には女性はいないので、一種の家として、陸であれば女性がこなすような仕事を男がこなすのである。したがって、家の中の調度品、工夫の品はハーヴィル大佐の海軍軍人という専門職と関係しているのだが、アンに「休息と家庭の幸福の場面」（“the picture of repose and domestic happiness”, 92）を与えてくれるのである。

このホームの幸福を描いた小さな家は、カントリーハウスのスケールの大き

さだけが人に幸福をもたらすものではないことを強烈に伝えてくる。つまりカントリーハウスが国家の比喩で語られることを見てきた我々読者は、イングランドの後継者はジェントリーや貴族ではなく、家庭をもうまく采配する能力のある海軍とその軍人であるかもしれないというメッセージを暗に受け取るのである。この印象は、ケリンチ・ホールをうまく管理できなかつたサー・ウォルターの姿を見ているだけにより一層強められると言ってよいだろう。海こそ土地の後に来るものかもしれないという指摘をしているのが、ギルバートとグーバーで、「ライムの海風に触れてアンが存在感のない受動性から復活したことは、海軍の生活が、父系相続と関係するジェントリーの腐敗からの逃避場所を提供している」(180) ことを意味していると言う。

V. バースにて

バースでもいよいよ上流階級の価値は下落する。それと反対に海軍軍人の価値は上昇する。それは、サー・ウォルターとエリオット家のいここにあたるレディ・ダルリンプル (Lady Dalrymple) との関係が描かれること、弟の曾孫でケリンチ・ホールの推定相続人であるミスター・エリオット、さらには、サー・ウォルター・エリオットとクロフト夫妻の対照が再び浮かびあがることを通じて行われる。

ある日、バースにダルリンプル子爵未亡人が娘のミス・カータレット (Miss Carteret) を連れてやってくる。サー・ウォルターは、一度は過去に不幸な成り行きで交際が途絶えてしまったこの貴族の親戚との付き合いを復活させようとして、丁寧な手紙を書き、つきあいの再開に成功する。レディ・ダルリンプル宅訪問の際、准男爵はエリオット氏とレディ・ラッセルをつき従わせるほど腰が低い。アンはこれには同行せず、学校時代の友人で、今は窮乏している友人スミス夫人の慰問のほうを選ぶ。チャリティのほうを優先させたのだ。これには家族の者はあきれてしまう。レディ・ダルリンプルは何しろ貴族で、社会的地位は高く、家柄のコネもあてにできるのであるから、それを低くみるアンが父姉には理解できない。しかし、アンは、次のように「よいお付き合いの相手」(good company) をエリオット氏に説明することで、富と血筋重視の装飾

的な貴族文化を拒絶する。

「私のいうよいお付き合いの相手というのは、賢い、知識の豊かな人たちのことですわ、エリオットさん。どんな会話でもできるほどのね。それが私のいうよいお付き合いの相手ですよ。」

「あなたは間違っていますよ。」と彼はやさしく言った。「それはよいお付き合いの相手ではありません。最良の相手です。よい相手に必要なのは、生まれと教育と礼儀作法だけです。教育に関しては、それほどこだわる必要はありません。生まれと礼儀作法が一番重要です。でも少しくらいなら学問があっても決して害にはなりません。それどころか逆にいい効果があります。」(140-141)

アンという「賢い知識の豊かな人」とは、教育のある人のことであろう。エリオット氏はベストなつきあう相手として、それを否定しはしないが、ここでは生まれや礼儀作法を重視し、その点でレディ・ダルリンプルとの付き合いに価値を認めており、彼女が世間から「魅力的な女性」と言われているということの意味もそのように取れる。しかし、エリオット氏自身が彼女は中身がない人間であると言っていることから分かるように、アンがいう、そして彼が言う理想の「つき合う相手」でないことは認めている。サー・エリオットも、エリオット氏と同じくレディ・ダルリンプルが中身のないことは分かっているが、貴族には頭があがらないのだ。その態度がアンには肯定しがたいのである。そのような貴族は、生まれがよく、地位も高くコネもたくさんあるのでエリオット氏にとっては魅力的なであろうが、アンにとってはそうではないのだ。

この引用で注目したいのは、エリオット氏が、礼儀作法というものを強調している点だ。これは当時のポライトカルチャー、すなわちジェントリーと商人階級とを結びつけるのに必要な要素であったことを第I節では見てきた。時と場所、場合に応じた会話ができ、服装を装い、芸術の趣味を持ち合わせ、党派性のない人間、粗野でもなく横柄でもない人間、暴力、酒、性的放縦とも無縁な人間こそがこのポライト・カルチャーに属する人間であった。ポライト・カ

ルチャーをエリオット氏自身が本当に身につけているかどうかは後で分かるが、彼は表面的にはそれを高く評価している。だからこそ、レディ・ラッセルはエリオット氏が長女エリザベスにとって、血筋の点だけではなく、最良の結婚相手とみていたのである。以下の引用では、レディ・ラッセルによるエリオット氏の人物描写を通じて、それまでの貴族とは対照的な、ポライトな人物がどういうものであったかを如実に伝えている。

あらゆるものが彼の中で一つになっていた。優れた理解力、正しい意見、世間の知識、暖かい心。彼は家族の愛情と名誉とを強く感じ取っていたが、思い上がりや心の弱さはなかった。彼には財産家の気前のよさがあったが、決してひけらかすことはなかった。大事なことは人に頼らず判断し、世間的な礼儀については世間の考えに従った。彼は落ち着いており、観察眼を持ち、温和で率直だった。酒に飲まれることもなく、強い感情と思われている利己的な考えに翻弄されることはなかった。しかし、愛想のよさと愛らしさに対する感性を有し、家庭の生活のさまざまな幸福に価値を置いていたが、これらは熱狂的な人間や情熱的な人間がめったに持っていないものなのだ。(137-8)

しかし、この夫人の人物判断は間違っていた。エリオット氏の本質を見抜くことができたのはむしろアンである。アンは表面的な礼儀正しさにはだまされない賢さを持っている。アンは次のようにエリオット氏を好きになれない理由をあげている。

エリオット氏は合理的、分別があり、洗練されている。しかし、オープンではない。感情のほとぼしりはなく、他人の悪や善を見ても、怒りと喜びに熱くなることはない。これはアンにとっては決定的な欠陥であった。彼女の初めの印象はぬぐい難いものだった。彼女は、率直で、打ち解けた、熱心な性格を何ものにもまして評価した。情熱と熱狂が彼女の心を今でもとらえた。誠実さをあてにできるのは、ときどき軽率でせっかちなことを

言う人間のほうで、冷静沈着で失言しない人間のほうではなかった。(151)

あまりに愛想のいい人間であるので、アンはエリオット氏が好きにはなれないのだが、その直感は、スミス夫人の告白によって正しいことが分かる。スミス夫妻に対して、エリオット氏は昔むごい仕打ちをしたのだ。エリオット氏はかつてスミス氏にたかりながら、ぜいたくな暮らしをし、スミス氏の散財をそそのかし、夫妻の生活が立ち行かなくなるようにした。しかし、自らは、裕福になったときにスミス夫妻を金銭的に助けることもなく、スミス氏は困窮の末、亡くなってしまう。多くの借金が残った後始末を、遺言執行人として託されたエリオット氏はその仕事を放棄し、西インド諸島にある地所の処分はそのままになっている。それができれば、スミス夫人にまとまったお金が入ってくるにも関わらずである。ここでは完全にエリオット氏の礼儀正しさが誠実さに裏打ちされたものではないことが分かる。この不誠実さはエリオット氏が、アンとはもう結婚できないと分かるやいなや、ミス・クレイと駆け落ちまがいのことをする結末にも現れている。ミス・クレイのほうにも保険をかけていたのである。

ダルリンプル夫人とエリオット氏の描写を通じて、貴族的な衒示的消費文化やうわべだけの礼儀作法は拒絶されていることが分かる。エリオット氏は、ポライト・カルチャーに属する人間であると見せかけてはいるが実際はそうではなく、むしろ昔ながらの、傲慢で残忍、性的放縦に身を任せ、浪費癖を持つ、貴族的な体質を持つ人間で、不誠実極まりない人間である。ある意味ではサー・ウォルターのコピーと言ってもよい。

バースにおけるサー・ウォルターの社交が夜ごとのパーティに費やされて訪問者に追従を言われるのをよしとする薄っぺらなモノなのに対し、クロフト夫妻の社交はバースにおいて知り合いが多く、通りを歩くごとに知り合いに出会って足を止める、よりカジュアルな心からのものであることがわかる。

クロフト夫妻は、満足のいくほど多くの知り合いがバースにはいたので、エリオット家との付き合いは単なる形式だけのものと考えており、少しも

喜びを与えてくれるものではなかった。夫妻はほとんどいつも一緒にいるという田舎の習慣を持ちこんでいた。・・・アンはどこへ行っても二人を目撃した。・・・二人の感情を彼女は知っていたので、それはとても魅力的な幸福な絵画だった。アンはいつも、できるだけ長く二人を見守った。・・・提督が旧友と会ったときの心のこもった握手を見てうれしい思いがしたし、時折小さな海軍仲間の集団ができて会話に花が咲き、クロフト夫人が周りにいる海軍将校たちと同じくらい知的で鋭く見えるのを見たときにも嬉しい思いがした。(158)

エリオット家の付き合いが形式だけのものと言われていることから分かるように、クロフト夫妻の海軍仲間同士の付き合いは肯定的にとらえられている。クロフト夫妻がイングランドをリードしていく適格な能力をもっていることは、特に夫人には知性が輝いていること、このように夫妻が貴族的な体質を持つサー・ウォルターやレディ・ダルリンプルとは対照的に描かれていることから分かる。

このようにサー・エリオットの周りにいる、エリオット氏をはじめとした貴族的な体質の不誠実な人間にはマイナスの空気がただよっており、クロフト夫妻と海軍大佐たちにはプラスの雰囲気漂っている。イングランドの後継者として、地主がもうふさわしくないのではないかとの裁定は、バースにきてからも、サー・エリオットが落ちぶれたことを何とも思わず、スケールは小さいながら、自分の虚栄心を満足させてくれる生活に満足しきっている次の様子からうかがえる。准男爵の家はカムデン・ハウスで最良の家であり、皆がこぞって彼らと知り合いになりたがった。

父と姉が幸福であることにアンは驚くことはなかった。驚きはしなかったかもしれないが、父が境遇が変化したのに落ちぶれたとは感じることもなく、在住地主の仕事と威厳を失ったことに何の後悔の念も覚え、小さな町に多くの虚栄心の満足を見出していることに、アンはため息をつかなくてはならなかった。(129)

理想的な地主には決してなれないところが娘アンの目を通じてはっきりと描かれており、貴族的な文化が否定されていることがよく分かる個所である。

この第Ⅴ節でみてきたことをまとめておこう。ダルリンブル子爵未亡人、サー・ウォルター、エリオット氏は富と血筋を重視する装飾的・貴族的文化を代表する者たちであり、その薄っぺらさと不誠実さは、スミス夫人を慰問するチャリティを実践するアンや、海軍の知り合いと心のこもった社交に興じるクロフト提督夫妻とは対照的に描かれていた。読者はこのバースの場面においてイングランドの後継者として上流階級はふさわしくはないということ、それに比べて海軍の価値がいよいよ高くなったことを認識するのである。

Ⅵ. 結論

『説得』はアンのホーム探しの物語である (Sodeman)。ケリンチ・ホールが当主の経済的無能さゆえに立ちぬかなくなり、アップパークロス、ライム・リージス、バースへと移動していく中で、アンは自らが属するジェントリー階級の、血筋と富と外見で人を判断する、男のための貴族的な衛示的消費の文化に見切りをつけ、品格、道徳、礼儀正しさを重視するポライトカルチャーを体現するホームを探していくことになる。

ホームを提供できる可能性のある人物たちはある特定の専門職に携わる者という形で現れてきた。海軍提督である。ケリンチホールの経済運営ができず、村人らの福祉にも配慮しつつパターナリズムを実践するということができない准男爵サー・ウォルターは、ケリンチホールをクロフト海軍提督夫妻に貸すことになる。サー・ウォルターはジェントリー階級の無能さを象徴しているのに対して、海軍提督夫妻は立派な人物として、ポライトカルチャーに属する者として描かれている。夫人は、レディと呼ばれているがホールを借りる際、交渉の前面に立ってビジネスに明るいことを示し (23)、その外見も背筋がピンと立っていて角ばった体型をし、活力にあふれ、男性性を付与されており、提督の船に乗って生活を共にしていた時間も長いとある (46)。船の上の世界は男女平等である。クロフト夫妻はバースにおいても虚栄に満ちた上流階級文化とは対照的な気さくな船乗り仲間集団の中心に位置している。クロフト夫妻の言動を通

して、読者は地主階級とカントリーハウスの揺らぎを安定化させることができるのは土地に立脚しない海軍軍人の世界ではないかと考えることになる。

そもそもホームを求めるアンはプロパーレディとしての才覚を兼ね備えた人物として描かれている。虚栄に染まらず、分別と儉約の精神をもち、家事の切り盛りができる。ケリンチの村人に対してはパターン的な振る舞いができ、マスグローブ家の場面で分かるように妹メアリー・マスグローブの不満の聞き役になり、彼女に代わってその子供の世話ができ、バースでは学校時代の友人であるスミス夫人という病人を慰問するなど、ケアのできる人物である。そのアンが求めるホームは、クロフト夫妻の属する海軍の世界にあるのではないかと読者は想像するが、クロフト夫人の兄弟のウェントワース海軍大佐がそのホームを与えてくれる人物である。アンはそもそも、8年前19歳のときにウェントワース大佐のプロポーズをラッセル夫人の忠告を入れて断っている。お金もコネも社会的地位もなく、怖いもの知らずで、幸運、楽天性、活力だけが頼りの青年であったからだ。しかし、8年後、27歳の今になって二人は再会し、大佐が海軍でも高い地位につき、敵の略奪品の売買などを通じて裕福になったことをアンは知る。しかし、いまだに8年前のことを根に持っている大佐はこれ見よがしにアンと違って決断力があるように見えるマスグローブ家のルイーザとつきあい始める。しかし、ライム・リージスのルイーザ転落事故の際、アンの行動力と思いやり、ケアの能力を見せつけられて、ルイーザを過大評価した自分の判断ミスを恥じ、アンに対する思いが戻ってくる。これ以降、バースにおける大佐の振る舞いは、礼儀をわきまえた、交流(Commerce)を行うことのできる人間であることを証明しており、大佐がアンにふさわしい相手になったこと、二人はホームを築けるカップルであることがわかる。

アンが大佐と一緒になれば、ホームは海上の船という可能性が高い。クロフト夫人は次のように言う。

女性は、イングランドで一番のお屋敷に住むのと同じくらい、船上でも快適なの。私は女性としては誰にも負けなくらい船の上を経験してきましたが、軍艦の宿泊設備ほど立派なものはありません。ケリンチ・ホールで

さえ、快適さやのんびりさという点では、・・・私が乗り込んだほとんどの船を上回ることはありませんでした。全部で5隻の軍艦です。(64)

船の上がお屋敷以上の居心地のいい居住空間を提供するのである。そしてそこは男女の共同意識の強い世界である。

最後の小説のヒロインは、平等な社会を発見する。男は家庭生活を評価し参加するのに対して女は公的な出来事に貢献する。相補的な理想であり、平等な性のイデオロギーの登場を予感させる。出産と子育ては、オースティンの小説と手紙の中では、荒涼としていて危険なものとして描かれている活動的なのだが、その女性の共同体に縛りつけられることはもはやなく、アンは結婚において勝利し、それは伝統的に男性の領域と女性の領域の統合を意味しているのだ。(Gilbert and Gubar 180-81)

アンがウェントワースと共に船の上の生活を共有すれば、当然平等な社会になるだろうということである。

しかし、船乗りとホームという考え方とのつながりの深さは船の上での家庭生活の場面だけではない。その深さがわかるのは、一船乗りが船上で妻と家族との最後の別れをし、家族を乗せた陸へと向かうボートが視界から消え、再び会えるかどうかは神のみぞ知ると船乗りがつぶやくときに、どれほどの苦しみが彼を襲うか分からないと語り手が言う時である(220)。船の上は不安定である。それは悪天候などの自然災害によること、火事などの大惨事が起こる可能性もあること、そしてこの作品で色濃く出ているのは、「将来の戦いの恐れだけが、彼女の輝きを曇らせることのできるものだった」(236)と、フランスとの戦闘の再開の可能性があるということである。

アンが、ケリンチ・ホールという揺らいだ家庭の代わりに発見したホームは、海軍軍人と共に生活する海の世界だった。しかし、そこもジェントリーのカントリーハウスと同じくらい政治状況によって不安定さを強いられている世界であった。パークが言ったように、カントリーハウス=国家=ホームととらえる

ことができるのであれば、ケリンチホールは、将来クロフト夫妻が去って相続人のエリオット氏が入ることにより、一層不安定化してゆくイングランドの姿を象徴しているだろう。また、アンも海というホームを見つけたとはいえ、それは土地の永遠性とかつては保守主義のイデオロギーが言えたのと同じくらいの確信を持って、海の永遠性を発見したとは言えないだろう。常に流動する世界が海にせよ、陸にせよ、待っているのだ。

引用文献リスト

<英語文献>

- Armstrong, Nancy. *Desire and Domestic Fiction: A Political History of the Novel*. New York ; Oxford: Oxford University Press, 1987. Print.
- Austen, Jane. *Persuasion*. Ed. Gillian Beer. London: Penguin Books, 2003. Print.
- Burke, Edmund. *Reflections on the Revolution in France*. Oxford World's Classics ed. Oxford: OUP, 1999. Print.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Clarendon Press, 1975. Print.
- Cohen, Monica F. *Professional Domesticity in the Victorian Novel: Women, Work and Home*. Paperback ed. Cambridge University Press: Cambridge, 2005. Print.
- Copeland, Edward & Juliet McMaster eds. *The Cambridge Companion to Jane Austen*. Ed. Copeland, Edward & Juliet McMaster. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. Print.
- Duckworth, Alistair M. *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels*. Paperback ed. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1994. Print.
- Frey, Anne. "A Nation without Nationalism: The Reorganization of Feeling in Austen's *Persuasion*." *Novel* 38.2/3 (2005): 214-234. *ProQuest Research Library: Literature & Language*. Web.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven ; London: Yale University Press, 1979. Web.
- Irvine, Robert. *Jane Austen*. London: Routledge, 2005. Print.
- Oxford English Dictionary* Anonymous Oxford University Press, 2009. CD-ROM (v. 4.0).
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Paperback ed. Chicago: University of Chicago Press, 1985. Print.
- Rohrbach, Emily. "Austen's Later Subjects." *Studies in English Literature, 1500 - 1900* 44.4 (2004): 737-752. *ProQuest Research Library*. Web.
- Sales, Roger. *Jane Austen and Representation of Regency England*. London: Routledge, 1996. Print.

- Smith, Anthony D. *The Ethnic Origins of Nations*. Oxford: Basil Blackwell, 1986.
- Sodeman, Melissa. "Domestic Mobility in *Persuasion* and *Sanditon*." *Studies in English Literature, 1500-1900* 45.4 (2005): 787-812. *ProQuest Research Library*. Web.
- Solinger, Jason. "Jane Austen and the Gentrification of Commerce." *Novel* 38.2/3 (2005): 272-290. *ProQuest Research Library*. Web.
- Tanner, Tony. *Jane Austen*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1986. Print.
- Todd, Janet M. *Jane Austen in Context*. Edited by Janet Todd. Cambridge: Cambridge University Press, 2005. Print. The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen
- Wiltshire, John. "Mansfield Park, Emma, Persuasion." *The Cambridge Companion to Jane Austen* (1997): 58-83. Print.

<邦語文献>

- 小森陽一・富山太佳夫他編 『政治への挑戦』 岩波講座文学第 10 卷、岩波書店、2003。
- 塩谷清人 『ジェイン・オースティン入門』 北星堂、1997。
- 鈴木美津子 『ジェイン・オースティンとその時代』 成美堂、1995。
- 富山太佳夫 「揺れるパークー『フランス革命についての省察』を読む』 岩波講座文学第 10 卷所収、115-36。